

復本一郎著『本質論としての近世俳論の研究』

櫻井武次郎

著者は、「まえがき」に「現代俳句を睨みつつの、私の近世俳諧史に対する最大の関心事は、『俳諧とは何か』ということである」と記している。それでは、本書の題とした『本質論としての近世俳論の研究』の、近世俳諧（俳論）の本質を、著者はどういう点に想定しているか。本書が一巻の論文集として成功したか否かも、その点をどれほど明らかにできていることになるのである。

本書について述べる前に、著者の、年齢から考えるとすこぶる多い著書の数々について、その問題意識の発展についてたどってみよう。まず、三十歳の時に著した『芭蕉における「さび」の構造』（塙選書、昭48）は、『芭蕉俳諧の基盤』として、その「へわび」の生活を論じた上で、「さび」について、前代の素隠、および後代の杜哉までも視野に入れて——すなわち歴史的な発展と受容史ということを考えて述べ、さらに「へわび」の類縁美として「へしほり」「へはそみ」「へからび」をも論じた。つづく『芭蕉連句評釈』（雄山閣出版、昭49）は、副題に「杜哉連句抄」と記すように、前著においてとりあげた寛政期の俳人杜哉の『冬の日集弁議』『俳諧古集の弁』を翻刻し、『芭蕉翁発句蒙引』を同じく杜哉の著と

断じる考察を加えるものであった。

著者の芭蕉の俳論についての関心はつづく。『芭蕉の美意識』（古川叢書、昭54）は、〈無常〉〈笑い〉〈さび〉〈艶〉〈位〉〈へかるみ〉〈へだ〉について項目をたてて論じるが、そこに見られるのは、たとえば〈笑い〉には『古今集』俳諧歌の受容、〈さび〉には「俊成・西行の受容」と副題が付けられるように、文学史あるいは和歌史の中における芭蕉俳論ともいうべきもののへの関心であって、それは、第一論文集に芽生えていた問題意識の成育したものであったと言えよう。そして、とりわけ著者が、その論の中心に据える〈さび〉については、書き下しの形で「さび——俊成より芭蕉への展開」（塙新書、昭58）の独立した一書にまとめられる。

しかし一方、著者は、芭蕉俳論以外へも領域を展げていく。

『鬼貫の「独ごと」全釈注』（講談社学術文庫、昭56）を試みたのは、ひそかに思うに、『古今集』俳諧歌とそれを鬼貫に伝授した鬼貫と同年齢の啓蒙的地下歌人有賀長伯への関心からもたらされたものであったと考えるが、ともあれ芭蕉に鬼貫を加え、さらに蕪村に関する二篇の文章も収めて『笑い」と謎』（角川選書、昭59）が編まれ、その「あとがき」で、「私は、俳諧文芸の特質を「笑い」と「謎」であると考えている」と記すようになる。であれば、冒頭に記した、著者の「近世俳諧の本質」とはどのような点にあるかも、明らかになるであろう。著者はまた、本書『本質論としての近世俳論の研究』の「まえがき」で「俳諧史とは、〈和歌離れ〉〈和歌一体化〉の相剋の歴史だった」とも述べてい

る。

便宜、本書の目次を写しておこう。「論文篇」として、

一 俳論史序説 (一)〈和歌離れ〉〈和歌一体化〉の俳論史、(二)「作意」の流れ、(三)「不易流行」説享受史

二 俳論史の諸問題 (一)『竹馬狂吟集』序文考、(二)伊丹風試論、

(三)鬼貫俳論の構造、(四)「うごく句」「うかぬ句」の論、(五)文里筆写淡々本『去来抄』〈故実〉の位置、(六)芭蕉俳諧の〈笑い〉の検討——付・翻刻『古今集俳諧歌解』、(七)風雅の誠、(八)位、(九)さび・しほり・ほそみ、(十)あだ、(十一)「浅き砂川」の意味

「資料篇」として、

『去来抄解』解題、(一)田文里著『去来抄解』、(二)文里筆写淡々本『去来抄』〈故実〉

「注釈篇」として

『鬼貫旅日記』(禁足之旅記) 評釈

以上である。

さて、本書が、「和歌離れ」〈和歌一体化〉の俳論史を巻頭に据えるのは、「まえがき」で、俳論史を、そのようなものであると認識したことを示しているためにも、当然のことであって、ふさわしい場を与えていると言つてよい。いわば、全体をリードする一篇なのである。その第一節は「初期俳諧における俳論」で『竹馬狂吟集』の序文を読み、つづけて『守武千句』の跋文から「守武が考えていた「俳諧」を述べ、「そこで要求されるのは、和歌性と滑稽性という二つの対立概念の止揚」であり、「このよ

うな俳諧観が俳諧史を貫通していた」とする。第二節「貞門俳諧

における俳論」では、徳元・貞徳・貞室・磐斎・季吟・元隣を検討、「和歌離れ」意識をはるかに凌ぐ「和歌一体化」の意識を指摘し、第三節の「談林俳諧における俳論」で、談林俳諧における〈和歌離れ〉と〈和歌一体化〉がどのようなものか確認しようとする。すなわち、惟中が「ひたすら和歌離れの道をひた走ろうとしている」のに対し、西鶴は、「ライバル惟中の「暴走」気味の寓言論に対する反撥があ」って「和歌一体化」をしはば公言」とする言い、つづけて、鬼貫においては「和歌一体化」と和歌離れがバランスよく均衡を保っている点」は評価しうるものの、「独ごと」に限って言えば、その論述においてやはり和歌一体化志向が〈和歌離れ〉志向を上まわっている」点において『去来抄』や『三冊子』に一步譲ることになる」とする。そして、第四節の「蕉風俳諧における俳論」では『去来抄』の一節から「和歌一体化」と〈和歌離れ〉が均衡を保っていたことを指摘し、『三冊子』の一節から「いかに〈和歌離れ〉に意を払っていたか」を指摘し、「芭蕉俳諧における〈和歌離れ〉志向の結果もたらされる「たはぶれ」は、一方において「さび」「しほり」「ほそみ」といった〈和歌一体化〉にかかわる美を理念とすることによって、極度に洗練されていた」とする。

論文篇の「俳論史の諸問題」の(一)は右の「初期俳諧」、(二)は「談林俳諧」で述べられた鬼貫、(三)は「蕉風俳諧」と対応する。なお、(四)は蕉門を中心としつつも貞門系松春と鬼貫についても見、(五)は資料篇(二)について検討を加えるものである。例えば、貞門俳諧や談林俳諧に関する論がここにはないなどの点から、

「序説」と「諸問題」の有機的な関係は十分に感じとれないが、部分的にはあるにしても、やはり、構成上、「諸問題」の十一篇は、「序説」の各論に当たるものと言ってよいであろう。

ところで、室町俳諧における『犬筑波集』、また古く、『菟玖波集』の中の「俳諧」、あるいは、平安時代の、一句連歌（短連歌）などについての考察は、「序論」にも「諸問題」にも入らない。

著者が、俳諧の本質の一つに「謎」を指摘するとき、当然、一句連歌は、その源泉として考えなくてはならぬはずだし、『菟玖波集』の「俳諧」は、連歌に「俳諧」という名称を与えた最初として——その理由は、私は、勅撰集になぞらえるために必要なためであったと思うが——、『犬筑波集』は、守武流を標榜する宗因流俳諧（談林俳諧）に対する貞門俳諧の伝統を考える上でひよっとして重要なヒントを与えてくれるかも知れない点で、俳諧史を論ずる上でも、本書のテーマに沿っても、やはり、著者の検討の結果を示してはしなかった。

しかし、右の如くに、著者が本書において取りあげた作家や作品が限られるのは、実は、俳論から俳諧史を眺めようとしたからであった。何よりも、本書は、『……俳論の研究』であって、当たり前のことであった。だが、果たして、作品をはずして俳論が存在しうるものかどうか。近代の評論とは異なって、俳論は、実作のための指導という面が強かったはずであり、俳論史を語るにしても、当人の、また同時代の作品の検討を背景においてなすことが必要なのではないかと思うのである。このことをあえて言うのは、著者に限らず、従来の連歌史・俳諧史が、実は、連歌壇

史・俳壇史であったり連歌論史・俳論史であったりして、作品によって連歌史・俳諧史を語ることに乏しかったからである。俳論を遺していない作家の研究の遅れている理由も、そこにあるであろう。

もっとも、右に述べたことは、本書が不完全なものであることを意味しはしない。まだ若い著者が、今後、研究を進めていく余地を残していることで、それは「あとがき」に「本書をまとめた今、私は、あまりにも多くの未解決の研究テーマを抱え込んでいる。そして、そのいずれもが、私にとって限りなく魅惑的な研究テーマである」と記すごとく、誰よりも著者御自身がよく分かっておられることなのでもある。本書の扱った俳諧史的時代は、いちおう元禄期までと考えてよい。それ以後の時代にとっての「俳諧とは何か」ということと共に、今後、右に記した面にも考察を加え、いつか壮大な、著者の「俳諧史」「俳論史」が書かれるだろうと期待される。

駆け足で残りを紹介しておく。「資料篇」は、田文里著の『去来抄』の注釈『去来抄解』（文化三年）とそこに併せて書写される淡々本『去来抄』故実篇（著者蔵）の翻刻。淡々本が、草稿本系から写されたのではなく、浄書本の存在を予想せしめると、「諸問題」の因で述べる。「注釈篇」は、『おにつら句選』所収の「禁足之旅記」に現代語訳・校異・語釈・評を付したものの、『おにつら句選』を底本としたのは、著者の手もとに同書があったからであろうが、ここはやはり、元の『大居士』を底本とするのが筋であろうと思う（『仏兄七久留万』も『大居士』から写したも

のである)。

なお、触れることは出来なかったが、「序説」に収める「作意」の流れは、有為な視点で、たいへん面白く読めた。「不易流行」「説享受史」は、〈和歌一体化〉「不易、〈和歌離れ〉」流行と

いう図式がすぐに想われるもので、元禄期までを中心とした本書の、いわば「その後」を概観するものと言えよう。

(昭62・4 風間書房刊 A5判 六三七頁 一二〇〇〇円)

新刊紹介

雲英末雄校注

『俳家奇人談・続俳家奇人談』

本書は、竹内玄玄一著『俳家奇人談』(文化十三年刊)・同『続俳家奇人談』(天保三年刊)の二篇を翻刻し、解説・索引を加えたものである。この両篇は、室町期から江戸中期までの連歌師・俳人一五二人の逸話を多くの挿絵とともに収めており、俳諧史研究上有意義な資料であると同時に、読み物としても興味深いものになっている。校注者の校訂・解説は、この二つの側面をふまえた適切にして必要不可欠なものであり、「挿絵文言翻字」「人名索引」「句・歌

初句索引」にもその配慮がうかがえるが、中でも「人名索引」は、人物の略伝・参考文献・内容上の誤りなどを記し、大変便利である。連歌・俳諧はもちろん、近世文学・詩歌一般に関心を寄せる人々にぜひお勸めしたい一冊である。

(昭62・10 岩波書店 文庫判 三七〇頁 五五〇円) [佐藤勝明]

雲英末雄編

『芭蕉連句古注集(猿蓑篇)』

本書は、芭蕉俳諧の白眉、近世俳諧の最高峰に位置するとされる『猿蓑』に収められた四歌仙について、江戸時代の注釈書を二十種集め、翻刻紹介したものである。今

回初めて翻刻されたものには、「猿蓑義」「猿蓑箋註」「七部集振々抄」「七部十寸鏡猿蓑解」「標注七部集」「俳諧七部集打聴」がある。特に、写本ではあるが「猿蓑箋註」の完本の発見紹介は、他の研究者にとっても僥倖であった。注釈書へ年代順に番号を付し、一句ごとに古注を通覧できるように配列してあり、それはそのまま種々の問題を提起していいよう。さらに、各注釈書についての詳細も施されており、便利を考えた懇切丁寧なつくりとなっている。俳諧研究にはもとより、近世文学研究全般にわたり資すること大である。実作者にとって、良き指導書となると信じる。

(昭62・12 汲古書院 B6判 三七〇頁 定価三二〇〇円) [荒滝雅俊]